

## 『地球温暖化説はSF小説だった その驚くべき実態』

の発刊によせて

川村晃生（かわむら てるお）

慶應義塾大学名誉教授・環境人文学者／文学博士  
「ストップ・リニア！訴訟」原告団長

広瀬隆氏の前著『二酸化炭素温暖化説の崩壊』（集英社新書、二〇一〇年）の中に、おもしろいかつ注目すべきエピソードがさし挟まれている。それは二〇〇九年一〇月に東京都杉並区で行われた、CO<sub>2</sub>温暖化論者・明日香壽川《あすかじゅせん》氏（東北大学）と非CO<sub>2</sub>温暖化論者・赤祖父俊一氏（アラスカ大学）の、CO<sub>2</sub>温暖化論をめぐる対決とも言えるようなシンポジウムでの挿話である。居住地が近かった広瀬隆氏は、それを聞きに出向いたのだが、その時に受けた両者に対する氏の印象をそのままここに引用しよう。

「赤祖父氏がどれほど冷静で誠実であるかは、次々とくり出される科学的な実証資料を見れば一目瞭然であった。一方のIPCC側の教授は、江守正多と組んで文部科学省の金で前述の問題冊子をつくった一人であり、赤祖父氏に何も反論できず、「消費量を減らすことが大切です」などと子供でも言える退屈きわまりない話を一時間も続けて逃げまくった。最後に聴衆が見えないほどのスピードで反論資料と称するものを一瞬だけ出して、「これは江守さんのものです」と言って自分でそのグラフを説明もできないままであった。」

このエピソードに拠る限り、この対決の勝敗は明らかである。それにしても世界中の人々が信じ込まされているCO<sub>2</sub>温暖化論が、たった一手の太刀打ちもできずに惨敗してしまったのは、なぜなのだろうか。そう考えた私は、おそらくその疑問を解くことが、CO<sub>2</sub>温暖化論の正否を決める鍵になるのではないかと考えるようになった。本書はそれを考える上で実に多くの示唆に富む。

CO<sub>2</sub>温暖化論の最初のかつ最大の根拠は、二〇世紀から気温が急上昇したとするIPCCの第三次評価報告書に掲載されたいわゆるホッケースティックの図である。のちにこれは、早くに広瀬氏が見抜いたように、デタラメな捏造されたものであることが分り、削除されるに至るが、ことほどさようにCO<sub>2</sub>温暖化論は出発からして詐欺まがいの話で始まったのであった。地球の気温が、温暖化寄与率三%にすぎないCO<sub>2</sub>の（一方、水蒸気は温暖化寄与率九五%とされる）変化によって、しかもCO<sub>2</sub>だけによって左右されるなどということは、どう考えても科学的正当性を持つはずがない。気温に限らないが、地球の環境は複雑系の中にあり、単一の原因に左右されるものではないはずだ。本書はその辺りの多岐にわたる諸問題を、分りやすくそして丁寧に説明してくれている。

そもそものはなし、地球の気候や気温などというものは、一定したものではない。西岡秀雄著『気候七〇〇年周期説 寒暖の歴史』（好学社、一九七二）は、一三三七年の新田義貞軍の凍死事件もあれば、一五〇七年以後八年間にわたる諏訪湖の不凍期もあったことを記している。ましてや縄文期の温暖化は、現在よりも二～三度前後も高い気温であったとされてもいる。

ともかく一度足を止めて、冷静に事態を捉え直してみよう。そのためにはマスコミをはじめとする世論の動向に惑わされないことだ。著者は「むすび」の中でこう呼びかけている。

「しかし読者は、たとえいかなる事変が起ころうとも、冷静に知恵を働かせて、その原因がCO<sub>2</sub>以外の何であるかを、ご自分の頭で考えていただきたい。周囲の言動に左右されないことが、最も重要である。」